清楽会会員演奏会と天野愛子

松本　佳子

清楽会は1919（大正8）年に大阪において、ピアノ講師の天野愛子を中心にその門下生の研究等を目的として設立された女性の団体である。活動としては、音楽会、会員演奏会、講演会などを開催しているが、今回は会員演奏会を中心に、それがどのような内容のものであったかを明らかにし、さらに天野愛子が果たした役割について考えていきたい。

1 清楽会の目的・活動

清楽会の目的は、「西洋音楽の普及及発達・音楽会及講演会開催等」（1924年）や、「1、会員は相互に技術を練磨し、真摯なる研究をなすこと、2、洋楽の進歩発達に勤め、社会の文化に貢献すること、3、会員相互の親睦を図ること」（1931年）となっており、のちに会員の技術の向上に重きが置かれていることがわかる。そしてその活動の一つめとして国内外の音楽家を招いた音楽会があるが、これは楽友会やピアノ同好会と共同で開かれることが多く、会場は大阪市中央公会堂などで開かれている。二つめは会員演奏会といって、天野にピアノを習う会員たちによる演奏会である。また三つめとして、音楽に関する講演会の開催、その他会員による新年会なども行われていた。このうち二つめの会員演奏会がもっとも回数が多く、会員の技術の鍛錬と研究という目的にも関わり、天野が力を入れていたイベントではないかと考えられる。

2 清楽会の会員

清楽会の会員数は、1924（大正13）年では70名、1931（昭和6）年の名簿では100名となっている。年齢は不明であるものの、小学校上級生から高等女学校卒業くらいまでの年齢の少女が多かったと思われる。たとえば、1921（大正10）年の演奏会に出演した範多貞子は1901（明治34）年生まれで20歳と少し年齢が上であるが、同じく高安みさをは1904（明治37）年生まれで17歳、1922（大正11）年の演奏会に出演した藤野桃子は1908（明治41）年生まれで14歳などとなっている。また実際に、高等女学校やそれ以上の学校の生徒が在籍していたことも分かっている。

また清楽会の会費は、1924年では1ヶ月1円、1931年では年額20円（一家族）、入会金は3円（一人）となっている。これだけの会費を払えるとなると、限られた裕福な家庭になってくると思われる。しかも、ピアノの練習をするには家にピアノがないとなかなか練習しづらい。大正期のピアノは一台300円から700円とされ、これを購入できる家庭はごくわずかであっただろう。こうしたことから、会員は、ほとんどが新中間層といわれる階層以上の家庭の子女であったと考えられる。

3 会員演奏会

清楽会の会員演奏会は、1920（大正9）年から1940（昭和15）年まで開かれていたことが確認されるが、そのうち1920年6月から1931年5月までは詳細な記録が残っている。それによると、会員演奏会は年に1～2回、計14回開かれていた。最初期は大人の会員によるピアノ演奏、ヴァイオリン演奏、独唱などもあったが、第3回くらいからは少女たちによる演奏会になったようで、現在でいう「ピアノ発表会」のような形になっていたのではないかと考えら

れる。また第8回（1925年）から第13回（1930年）は「コドモ部」または「会員」による、舞踊や合唱が行われていたことがわかる。一回の出演者（ピアノ演奏）は、20名から40名ほどとなっており、会場としては、三越ホール、大江ビル、朝日会館などが利用されていた。

ピアノ演奏の曲目をみると、初級クラスのものから上級クラスのものがみられ、中にはかなりのピアノの技術をもった会員がいたということがわかる。こうした、ある程度大きな会場で、多数の観客の前でピアノを演奏することによって、会員のピアノの技術向上が図られたものと考えられる。また会員同士が切磋琢磨する場にもなっていたということができるだろう。

4 天野愛子について

清楽会を主宰した天野愛子は静岡県生まれ、東京で育ち、1901年に東京音楽学校の予科に入学、その後器楽部本科、研究科を経て1905（明治38）年に卒業した。卒業後、姉の北村初子とともに、東京で「本郷音楽教授所」「皐会」としてピアノを教えたり、演奏会に参加するなどしていた。その後1916（大正5）年ごろ大阪に移ってきている。そして1908（大正7）年にピアノ同好会に参加、翌1909年に清楽会を設立した。また樟蔭高等女学校や大阪府女子専門学校でも、ピアノを教えた。

天野は「さびた味わい」があると表現されるなど、一見地味な雰囲気があるといわれている。清楽会に対して「献身的な努力」をしているとされ、熱心にピアノの指導をしていたことがうかがえる。会の活動が「堅実な歩み」「落ち着きがある」と評されているのも、天野の人柄をうつしているということができる。ピアノだけではなく洋楽全般への情熱は深かったようで、研究熱心な面もあったということである。清楽会以外の音楽会の世話などもし、関西の楽壇に足跡を残した。

清楽会の会員演奏会は、日頃練習しているピアノ曲を発表する場となっており、会員たちがピアノの技術を研究し上達する機会となっていたということができる。中には上級者レベルの技術をもつ会員もおり、会員たちは日々研鑽を積んでいっていたものと考えられる。天野愛子は門下生にピアノを教え、彼女たちのピアノの進歩に大きく貢献した。また限られた階層の中だけではあるが、家庭の中にピアノ、洋楽を普及させていったということができる。